

マックス・ウェーバーと「ウェストミンスター信仰告白」*

—予定説をめぐる—

村 川 満**

一

カルヴァンといえはすぐに予定説と考えることは、神学やカルヴァン研究の世界ではもはやほとんど見られないが、一般の人々の間ではこの考えは依然として広くゆきわたっている。その原因の一つとして、マックス・ウェーバーの有名な著作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』¹⁾と、大塚久雄氏によるその紹介の影響が強くはたらいたことは否定できないであろう。そしてそこには、カルヴァンについてのみならず、ウェーバーについても、正しい理解がなされてこなかったのではないかという問題がある。この問題全般については安藤英治氏の詳細な研究²⁾があるが、予定説に限定しても、なお考えなければならない事柄が沢山ある。ここではその一つとして、ウェーバーが『倫理』論文第二章で、カルヴィニズムの予定説の説明のために引用した「ウェストミンスター信仰告白」をめぐる、ウェーバーと予定説の問題を取り上げたい。

たしかにウェーバーが『倫理』論文の第二章で、カルヴァンあるいはカルヴィニズムの予定説を取

り上げて、非常にインパクトの強い議論を展開していることは事実である。しかしながら、カルヴァンと予定説とウェーバーを短絡的に結びつける俗説に対して、ウェーバー自身のこの問題にたいするアプローチの仕方は非常に複雑かつ慎重であることに注意しなければならない。まず、この章の表題「禁欲のプロテスタンティズムの天職(職業)倫理」で言われている禁欲のプロテスタンティズムとはカルヴィニズムだけを指すのではなく、その担い手として、1) カルヴィニズム、2) 敬虔派、3) メソディズム、4) 洗礼派運動から発生した諸ゼクテ、の四つをあげて、それらを順次に扱っていくのであるから、ウェーバーがカルヴィニズムだけを問題にしているのではないことは明らかである。また、予定説についても、カルヴィニズムとだけ結びつけて考えているのではないことは、次の文章にはっきり示されている。

「この教義は、事実上カルヴァンの立場をあらゆる点で厳密に固守した一派、つまり長老派の信徒よりはるかに広い範囲にわたり、改革派的教説の隅の首石として堅持されてきた。1658年の独立派のサヴォイ宣言ばかりでなく、1689年のバプティスト派のハンサード・ノウルズ信仰告白³⁾も

*キーワード：予定説、ウェーバー、「ウェストミンスター信仰告白」

**関西学院大学社会学部教授

- 1) 以後、慣用にしたがって『倫理』論文と略称する。引用は大塚久雄訳(岩波文庫版)により、引用箇所は本文中に書名も省略してただ(～頁)とのみ記すが、訳文を訂正することもある。必要に応じて、原典 Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, I, Tübingen, 1920. の該当箇所のみを(S. ～)と付記する。梶山力訳(有斐閣、1938年、安藤英治編未来社版、1994年)も参照する。
- 2) 従来の解釈の偏向の指摘と正しい方向への軌道修正がなされている諸論文はとくに同氏の『ウェーバー歴史社会学の成立』、未来社、1992年、に収められている。本稿もそれに負うところ甚大である。
- 3) 大塚訳ではハンサード・ノリーの信仰告白となっているが、これはパーソンズの英訳で the Baptist Confession of Hanserd Knolly あるいは Hanserd Knolly's Confession となっているのにひきずられたのであろうか。原文では die Baptistische Hanserd Knollys confession (S. 124)、Hanserd Knollys Confession (S. 89)、Hanserd Knollys Declaration (S. 90) となっており、Knolly ではなく、Knollys が人名で、発音もノウルズとするのが正しいと思われる。ハンサード・ノウルズ (c. 1598-1691) は17世紀のパティキュラー・バプティ